

場のニューウェーブ

荻原 裕 幸

加藤 治 郎

〈二〇〇一年四月十三日～五月九日の電子メールによる対談より〉

【歌葉】の登場

■加藤 本日は、「未来」創刊五十周年の記念企画ということで、荻原裕幸さんにお越しいただきました。と、いいますか、実際には電子メールを使っています。現代短歌の八〇年代、九〇年代、それから現在と未来について、お話を伺いしたいと思っています。さて、今年の一月、オンデマンド出版の【歌葉】がスタートしましたね (<http://www.bookpark.ne.jp/utanoha/>)。どうなんですか。感触というか、手応えというか。

クシヨンのノウハウがそのまま活かせるシステムだったのです。出版を一変させてしまうというのは、まず「版」が電子データ化されていて、著者の希望するかぎりいつまでも残せることです。売上げ部数にノルマがないため、五年後十年後も絶版がありません。従来のシステムでは、大家と呼ばれる人でも、売上げがのびなければすぐに絶版ですから、これは画期的です。それから、インターネットを利用した販売ですから、読者が全国どこからでも簡単に注文できることでしょいか。歌集が書店に並んでいない、入手にくいという不満をよく聞きますが、インターネットが簡便になって普及すれば、こうした不満も【歌葉】では解消されると思います。

■加藤 名古屋で編集をして、東京でプリント・製本するというのもインターネットならではのようです。首都圏に集中した出版システムも変わってゆくかもしれない。絶版がないから五年後にね、【歌葉】叢書が、こう一〇〇タイトルぐらい揃ったら壮観だろうと思うんですよ、いつも。都度製本するわけだから本の品質は劣化しない。あと、低コストで出版できるとか、紙の無駄がなくて自然環境保護に繋がるとか、いろいろオンデマンド出版のメリットはありますね。で、【歌葉】を、ここ四、五年議論されてきた〈短歌とインターネット〉という視点から見るとどうでしょう。

■荻原 趣味的な問題やその他の事情から、結社を避けてインターネットを短歌活動の場を中心に選んでいる歌人たちに、継続的かつ外部にひらかれた活動のスタイルを提供できる、ということがあるのではないでしょう。かなり大勢いますから、大きな波になるかも知れません。どうしても自己満足的になりやすいホームページ、歌会や議論は自在にできるけれど記録性が弱いメールリングリスト・

■荻原 八〇年代から動いている短歌の変革をトータルに考えると、ついに最後のプログラムがはじまった、という気分です。スタート直後から、インターネットを中心に、さまざまなメディアでとりあげられました。歌集の出版事情を一変せしめようシステムですから、期待と不安とがこもごもにあるようですけど、おおむね好評という感触をもっています。ただ、企画やシステムに対する評価が先行してしまっていて、実際に刊行された歌集への反応がまだしっかりは掴めていません。徐々に売れているとは聞いていますけど……。

■加藤 確かに、読売や朝日といったジャーナリズムが鋭く反応したのも【歌葉】のシステムに対してでした。始まってまだ三ヶ月だから、歌集への評価はこれからでしょう。玲はる名『たった今覚えたものを』、飯田有子『林檎貫通式』、勝野かおり『B r 臭素』、村上きわみ『キマイラ』、どれも問題作だと思います。それにしても、最初にあなたとオンデマンド出版の打ち合わせをしたのが、去年の八月だったよね。名古屋駅の名鉄グランドホテルだった。ぼくがオンデマンド出版の『希望の国のエクソダス』を見せて説明したところ、あなたは「完全に理解した」とつぶやいた。それが始まり。名古屋がオンデマンド歌集出版の発祥地となったのは愉快です。名古屋人のモダンイズム気質かな。それから、企画を詰めて、参加者を募って、制作、配本まで半年。これは驚異のスピードだったね。ずいぶん無理言ったけど。で、歌集の出版を一変せしめようシステムということでは、どの辺がポイントになるでしょう。

■荻原 科白って一部分だけ引用するとかっこいいですね。前後のあれこれは伏せておくことにしますが、つまり、それまでにビジネスとして経験していた書籍の編集やデジタルデザインのディレ

電子会議室など、これまではインターネットの短所・弱点の方ばかりがめだっていました。【歌葉】という、ほとんどインターネットだけを利用した歌集・歌書の出版のシステムが加わることで、状況を大きく転換できます。歌集・歌書で自分の活動を他者に問うこと、明確に記録を残すことが可能になれば、作家的責任をもった仕事もやりやすくなりますね。

遠からず、印刷メディアとインターネットが、双方の利点をとりこみながら短歌の場を広げてゆく時代になると思います。いや、すのではじまっていると言ってもいいのかな。

電腦短歌の世界へ

■加藤 インターネットの世界が、入口から出口までシステムとして完結しましたね。【歌葉】は出口にあたる。結社、ジャーナリズム、歌集出版社からなる歌壇という世界が一つあるわけだけ。【歌葉】の登場によって、インターネットが自ら出版機能を持ったというふうに見ると、歌壇のシステムに頼らずに世界が完結する。

ネットの短歌人口は三万人という説がありますが、荻原さんも出演したNHKの「電腦短歌の世界へようこそ」でそう言っていたんですよ。数も重要だけど、そこから象徴的な歌人が登場するか。加藤千恵さんが、今度一般の出版社から歌集を出すインターネットで公表して、驚いたというか、そうだろうという感じもしましたが、十六歳でしたっけ。「電腦短歌」では、スター的な存在でした。

3人で傘もささずに歩いているいつかばらけることを知ってる

加藤千恵「うたう」(二〇〇〇年)

星の月夜の太陽あたしたち今なら水になれる流れる
飲みかけのジンジャーエールと書きかけの詩を残したままそっと
立ち去れ

同

って歌をつくる方です。ぼくは、短歌研究社の「うたう」という雑誌でね、コラボレーションという形で出会った。彼女、結社に属さず、インターネットが中心。俵万智さんとはデビューの仕方が全然違う。一気に流れをつくる予感がします。

■荻原 加藤千恵さんは十七歳かな。素敵なキャラクターだと思います。商業的に洗練されているタイプではないですけど、自己プロデュースの天才ですね。柊野浩一さんが彼女を「電脳短歌」の主役として扱ったのは卓見です。「SWEET LOVERS」というホームページをひらいていますが、その才能がよくあらわれていますよ。

(<http://www.geocities.co.jp/HearthLand-Namiki/6174/>) また、彼女たちがはじめた同人誌「ハッピーマウンテン」も面白い。旗仕様とか壁掛け仕様とか、破天荒なプロデュースで、これまでにな「場」を見事につくりあげている。自分の、あるいは自分たちの作品が、どういった「場」のなかでもっとも活きるのかをほんとによく理解しています。だから、従来の印刷メディアにそのままのっかって、商業的な出版に踏みきるのは、失敗する可能性も高いと思うんだけど、何かやってくれるだろうと大きな期待はしています。それにしても、インターネットの世界というのは、リサーチが追いつかないほどいろいろな人がいて、ぼくたちがひらいている「電脳短歌イエローページ」というリンク集（ホームページのURL一覧）だけでも、現在四〇〇件弱の登録サイトがあります。（<http://www.imagenet.co.jp/ssjyp/>）短歌のリンク集としては最大規模なんでは

すけど、おそらくこれでも実数の一割程度。ホームページを持ってなくてインターネット上にいる歌人は、そのさらに何倍もいるはずですから、三万人という説も、あながち外れてないように感じます。ところで、インターネットにおける短歌がこうして盛んになった理由は、むしろパソコンの普及によるところが大きいのですが、先に「最後のプログラム」と述べたように、それだけじゃなくて、八〇年代の女歌の台頭あたりからの変革が遠因だとぼくは考えています。加藤さんは、八〇年代からつねに変革の渦中にいたわけですが、何かそこに、一本に収斂してゆく道筋というものを感じたことはありませんか。

脱〈短歌〉現象

■加藤 一九八〇年代以降の短歌史をどう見るか。それは今書かれつつあるわけで、いろいろな視点が提供され、必要であれば呼称を考えればいいと思うけど、やはりその時代時代に了解されていた名称は尊重すべきだと思います。「ライトヴァース」とか「ニューウェーブ」という呼称を使うのは、それを固定的に見るということではなくてね。それぞれどう位置づけるか、仮説の連続です。

■荻原 仮説の連続ってよくわかります。ぼくもそう思います。七〇年代から兆したいわゆる「女歌」にしても、河野裕子さんや阿木津英さんたちがアジテーション風に宣言をしたのは、つまり仮説です。八〇年代半ば以降、女歌は終わった、というようなことも言われましたけれど、終わったのではなく、可能性をはらんで定着したんだと思う。ライトヴァースもニューウェーブも、この点でよく似

ています。前衛短歌時代の終焉と女歌の台頭との間には、多くのもの

が生まれているのに、「ここ」が世界の中心だ、と言いきってしまふような仮説的な展開がなかった。「世界が見えなくなる」時期で、仮説どころではなかったと言えるかも知れません。むしろ仮説はまだ仮説にすぎませんけど、歌人を元気にするし、賛否がわかれようと、そこにたしかな足跡を残します。加藤治郎はその典型的タイプですね。

■加藤 以前『TKO』で、ライトヴァースから口語の問題を抽出して「口語体というのは、前衛短歌の最後のプログラムだった」とあらゆる方法上の問題を試行した前衛短歌が口語だけは作品として結実できなくて、それが八〇年代にクリアになったという見解を出しました。ニューウェーブは、その延長にあって喩法を中心に方法上の余白を埋めつくした運動体であったと思います。表記的喩、超オノマトベといった用語を作りましたが、前衛短歌を作歌の原点とする自分にとっては、当然の立場だったと思います。

■荻原 『TKO』には、仮説的断言が炸裂していましたね。前衛短歌からライトヴァース・ニューウェーブまでが一直線に結ばれた。揺らぎの大きかった七〇年代にも、前衛短歌以後の口語や喩の問題はすでに胎動していて、たとえば三枝昂之さん、永田和宏さん、福島泰樹さんたちが論作でアプローチしていたのに、仮説という方法へは向かわなかった。ライトヴァース・ニューウェーブっていう流れは、当然その三人を含めた七〇年代の試行も経由しているから、「ここ」だけが世界の中心だ的な仮説には、「女歌」以上に反撥も大きくなったのだと思います。九一年に、朝日新聞にエッセイを依頼されて、「ニューウェーブ」をアジテーションした翌日からすで

に、そんなものはエコールじゃない、という批判をうけました。

■加藤 でも、前衛短歌を起点としない一群の歌人がいたのは事実です。林あま里、俵万智、穂村弘、山崎郁子、早坂類、みんな別の何ものかでしたよね。一方、九〇年代の半ばは、すでに永田和宏の「短歌結社」としては、選歌と歌会という、この二つが最後に残る最も大きな要素ではないか」という発言があったんです（『短歌研究』一九九四・二）。これは現在まで不動の立場ですね。で、『新星十人』のエッセイでちょっと書いたんですが、「ライトヴァース」「ニューウェーブ」を貫く流れを「現代短歌の脱〈短歌〉現象」として観たらどうかということなんです。この場合の〈短歌〉というのは、〈結社・選歌・歌会〉というシステムのことです。そういったシステムから自由な才能が登場したんだと。

こんなにも風があかるくあるために調子つばづれのぼくのくちぶえ
山崎郁子『麒麟の休日』（一九九〇年）
水滴のひとつひとつが月の檻レインコート（一九九〇年）

カーテンのすきまから射す光線を手紙かとおもって拾おうとした
穂村弘『シンジケート』（一九九〇年）

早坂類『風の吹く日にペランダにいる』（一九九三年）
こういう感性ですね。選歌というシステムから生まれてくるとは、とても思えないんです。〈結社・選歌・歌会〉から自由な感性という見方をすると、現在のインターネットの世界に通じる道筋が見えてくるように思います。

■荻原 なるほど。前衛短歌は、大変革でしたけど、近代の短歌史やシステムを総合してゆく運動とも言えるから、たしかに八〇年代以降は、脱〈短歌〉という感じがありますね。となると、やはり「女

歌」あたりがその端緒になるのかな。微妙なところかな。遥空の言った「女流の歌を閉塞したもの」からの脱とみるか、男性中心の世界観からの脱とみるかでも、ずいぶんかわりますね。

ぼくは、前衛短歌運動およびその時代は、岡井隆さんが六〇年代はじめに語った「場」を、革新・刷新したのではなく、ロマンティズムとかリアリズムとかモダニズムとか複数の歴史を抱えた場として、ゆるやかに統合したと考えているんです。「女歌」以降は、さきほどの仮説の連続によって場が分裂・細分化し、大きなゆるやかな場が崩れていった。九〇年代は、さらにその分裂・細分化が加速して、個人のレベルに近い単位までばらばらになりかけている。穂村弘さんが『短歌という爆弾』などで書いた「わがまま」というのは、仮想ではあるにせよ、場の個人レベルへの分裂を言っているのだと理解しています。加藤さんの提示した「脱〈短歌〉現象」というのは、この、場の分裂・細分化と时期的に重なるので、互いに同じ現象を言っているのだと思いますが、〈結社・選歌・歌会〉というシステムを一括りにしたとき、たぶん捨象されてしまう、結社ごとの個別の差異についてはどう認識されているのでしょうか。

場の変容と作品

■加藤 結社の理念が希薄になっていることは明らかで、いま結社のカラーというのは、岡井さん、馬場さんといった個性から滲んでいるのだと思います。理念の希薄さというのは、批評の枠組みの問題に繋がりますね。これも場の問題ですが、かつての「アララギ」なら「生活即短歌」で、歌われた内容は作者の体験に忠実なものとなりましてね。このあたりが一つの求心力となって、おもしろい場が生まれてくるんじゃないかな。

■荻原 なるほど、枘野浩一さんのかかわる場をどこまでの範囲でとらえるかで、風景がかわりそうですね。ぼくは、彼の近くにある「かんたん短歌」への求心力の高い場と、彼に正面から批判を向ける場とをあわせて、さきほど言った公倍数で結ばれる結社の風景と共通するものを感じます。水と油的な二つの場ですが、インターネット上では繋がっていますから。こうして考えると、結社とインターネットはもとより、ぼくには、九〇年代の半ばあたりからの短歌のほとんどの動きが、場を成り立たせるための方法論の模索に見えます。本質的なところでぶつかりあうとどんどん分裂・細分化してしまう場を、重心を本質らしきところからすこしだけずらすことによって場を成り立たせる方法論です。視点をかえて新しい何かを模索するわけですね。加藤さんが以前に書いた「題詠の時代」の意味も、そこに繋がるのではないのでしょうか。

■加藤 「題詠の時代」ですね。一九九六年です。確か「玲瓏」のシンポジウムで発言して、読売新聞に書きました。その後「短歌研究」で題詠の特集がありましたね。へるめす歌会、荒神橋歌会、それからちょうどインターネット上の題詠歌会が活発になったところです。戦後派、前衛短歌から女歌、ライトヴァースまで、戦後の短歌は自律的にモチーフを見出してきて、とても題詠がメインになる余地はなかった。現代歌人協会が四十周年記念の会報で題詠を募ったのが象徴的。かけがえのない自己表現であり、有用であろうとした戦後短歌の完全なる終焉の風景を見たわけです。ところが、いま「場を成り立たせるための方法論」と言われましたが、岡井さんの

いう前提で批評できた。「未来」では、もう批評の前提というものが成立しないと思う。場と作品をどう繋いでいくか、場の変化をどう批評レベルまで結びつけていくかがポイントです。

■荻原 ……。加藤さんがそこまで断言するとは思わなかった。ぼくは外から見ていて、結社についてはよく似た印象を持っています。が、現場の人としての加藤さんのことばは、やはりずっしり重みがありますね。ただ、結社について言うと、ぼくも、だからだめ、とは思っていません。むしろ新しい可能性が出たかも知れないと思う。理念やシステムの公約数で結ばれるんじゃないかと公倍数で結ばれる結社の可能性です。たとえば岡井隆さんや馬場あき子さんという個性、あるいは単に月刊誌というシステムでもいいんです。なにかしら会員同士が快く参加できる条件を共有していて、そこに複数の理念が同居している場としての結社です。「未来」はすでにそれを実現しはじめているのかも知れませんね。インターネット上の短歌も、これによく似た感じがありませんか。

■加藤 「電脳短歌の世界へようこそ」で、枘野浩一さんが、短歌は分かりやすい言葉で表現され、きちんと人に伝わらなければいけない、という発言をしていましたね。加藤千恵さんもそれを受けていた。口語で歌うこともそこから導かれているわけです。

話し手をまねけに見せる手法①「ボク」や「アタシ」はカタカナで書け
枘野浩一「ますの。」(一九九九年)

今夜どしゃぶりは屋根など突きぬけて俺の背中ではじけるべきだ
同

これ、シンプルだけど、明確なそして手強い作歌理念だと思えます。電脳短歌という場と作品がきちんと繋がってくる。批評の前提

「作品を作るための動機づけとして、人間の集団があり、その集団の中にまじって歌を作る場(座)といってもいい」があるときには、その場とか座とかいう条件もまた、〈方法〉の一種なのではないか」という発言があった。〈場〉そのものが〈方法〉であるということですね。これは、参ったという感じがする。こうなると「場の方法化」というのは、前衛短歌の最後のプログラムだった」と言い替えるべきなのではない。結局、前衛短歌は終わりのない旅なんだな。

■荻原 いかにも岡井さんらしいし、それに加藤さんらしいコメントですね。岩波書店のへるめす歌会が九五年で、あのあたりからいきなり場とか座の方へ向かった感じがかな。どれほど強烈な個性でも題にはさからえない、という点を逆手にとって、ばらばらな個性たちを一つの場の中に繋いでいった。流行のようにおこなわれている歌合や朗読も、個性以上に強くてしかも個性を壊さない場ですから、みんなが価値観の違いを超えて一つの場の中にいられるわけですね。それから、岩波書店と三省堂の二つの短歌辞典についても、広い意味での場づくりだったと言えるんじゃないでしょうか。題詠に対する批判はもちろんのこと、歌合は遊びじゃないか、朗読は見世物じゃないか、辞典は権威的だという批判もありますが、そうした危険をみんな承知で参加している。活力を失うことはもっと危険だとみんなが感じているのじゃないか。

ただ、危険を承知で活力を得るのはいいんですけど、そこからさらにもう一步踏みこみたい。現状はまだ活力にしかなくなってないから。場の方法化というレベルを超えた、場の文体化こそ二十一世紀のプログラムだと言ってみたいです。場の文体化、つまり活力以上にはつきりと作品に組みこまれる場の創造です。短歌におけるイン

ターネットの可能性の中心も、やはりそのあたりかと……。

■加藤 そうですね。柗野さんの周辺に集まっているマスノ短歌教の「信者」たち。「うたう」で頭角を現したといえるかな。イヤリングをお確かめくださいという暗号で動くスパイが電車の中に 佐藤真由美「うたう」

この変なドキッという感じの衝撃は巨大イカを知った時と似てる

脇川飛鳥 同

白い打球がのびていくのも足下に落ちてしまうのも悲しく見てる

杉山理紀 同

口語でコミカルな味わいのある作品ですね。なんか似てるんです。柗野さんのキャラクターの影響というべきか、こういう感性に柗野さんが出くわしたというべきか。「かんたん短歌」という文体があるとすると、インターネットという場から出てきた必然性はあるんじゃないかな。いい意味でのゲーム感覚、即時性、じーっと考え込むじゃなくてね。批評というよりは、ルールに似たものに支えられている。分る言葉で分りやすく伝える。自己表出というよりもコミュニケーションなんだな。今まで何回も、短歌史から切れているという言い方がされたけど、今度はほんとに「切れた」。

場のニューウェーブ

■加藤 どうでしょう。ぼくたちにとっては、空気のようなもんだけど、SS-PROJECT ラエティティアについて。どんな場を創ろうとしているのかといったこと。

■荻原 SS-PROJECT は、私見を端的に言ってしまうと、ニューウ

ェーブの文学運動です。短歌を核に据えた、新しいコミュニケーションスタイルを模索する運動です。結成以後三年ですが、加藤治郎、穂村弘、荻原裕幸が、作品レベルで個々に展開していた文体・方法での「ニューウェーブ」を、場のレベルで実践してきたんじゃないでしょうか。話題に出た【歌葉】の企画・プロデュースは、言ってみれば「歌集」のニューウェーブですし、同じく話題に出た電腦短歌イェローページの運営も、短歌のネットワークという意味での「歌壇」のニューウェーブだと考えています。

■加藤 SS-PROJECT は、「フォルテ」の電腦版という感じでスタートしたかな、ぼくとしては。「フォルテ」は、4号で途切れたけど「ハルオ」の母胎となったから、得る物があった。今度は【歌葉】ひとつとっても、人、物、金が動くわけで、社会的な責任が生じた。重いです。【歌葉】という子どもが出来てね。錢というか。

■荻原 ラエティティアも、そうしたSS-PROJECTの活動の一環として創設されました。結社誌や同人誌等の印刷メディアのかわりに、電子メールを主媒体にしてコミュニケーションをする作家のグループです。創設の段階では、「結社」のニューウェーブという部分があきらかにあったと思うのですが、すでに百七十人近いメンバーを抱えていますから、ぼくたちの思惑を超えて、グループ自身で成長していますね。電子メールのやりとりをしながら、短歌に関する議論、それからミニシンポジウムや歌会、あと雑談など、自在に展開しています。それと、川柳作家と俳人があわせてメンバーの割合はどいまずので、連句、句会も定期的におこないます。非公開での活動ですから、閉じている部分もありましたけど、昨年、外部への発信の要素もすこしずつ広げてみようと思ひ、メールマガジン

(電子メールによる雑誌)を創刊しました。現在、第九号を編集中です。概要はざっとこんなところですが、加藤さんの視点からはどうでしょう。

■加藤 そうね。ラエティティアは、結社の近未来形というか。インターネットに接続できるというのが参加資格で、今現在には制約になっているけど、それは徐々に解消していくしね。思いつくままに、結社と比較してみようか。

〈結社〉

○会員 基本的に歌人のみ

○年齢 高齢化

○会費 年間二万円程度

○費用 郵便、印刷の経費

○運営 多くの人手がかかる

○作品 月刊の結社誌で発表

○選歌 各選者が担当

○歌会 各地で開催

○教育 選歌、添削、評論等

○主宰 基本的に居る

○組織 ピラミッド型

○交流 夏の大会ほか適宜

○情報 なかなか伝わらない

○師弟 主宰・選者が師

○伝統 近代以来の系譜意識

○帰属 帰属意識強い

○所属 一結社が多い

こんなところかな。結社は、運営、雑誌発行にコストと労力がか

〈ラエティティア〉

歌人、川柳作家、俳人、編集者など

二〇代から三〇代が中心

現在無料

ネット接続料程度で安い

数人で可

メールマガジン、ホームページ

選歌なし。歌会で選(投票)がある

電子メールで開催。句会も開催

自由放任。議論の過程で伝わる

不在。SS-PROJECTが運営

水平型

オフ会など適宜

即時、全員に発信

師弟関係なし

これから

個人によってまちまち

結社にも所属するなど複数入会

かる。師弟関係、伝統、選歌を含めた教育機能が強みか。ラエティティアは、ジャンルを超えた文学集団であること、運営のコストが低いことがメリット。反面、師弟関係とか、伝統、帰属意識、教育機能といったところは弱いか。ちょうど、結社とラエティティアは、相互補完的です。そうすると、自然な流れとして、結社の電腦化、ラエティティアの結社化ということが考えられますね。結社の電腦化は、部分的には可能ですが、高齢者が多いことを考えると、難しい面がある。ネット化は、メンバー全員がそうならないと運営上支障が出るし、メリットが出にくいんです。逆に、ラエティティアの結社化。メンバーの異議も出るだろうし、誤解も招くでしょうが、メンバーシップを強化したり、教育機能を持つという範疇であれば、検討の余地があると思ひますが。ぼくとしては、こういう状況の中で、結社の存在意義を考えていかなきゃならない。

■荻原 羅列してみると迫力がありますね。比較して興味深いのは、やはり、結果として、相互補完的になっているところかな。ラエティティアの運営スタイルを決めるとき、ぼくたちは、反結社、結社批判という考えをほとんど持ち込んでいない。インターネット上で文芸のグループをつくるのに、何が望ましいスタイルなのか、どうすれば活力を得られるかを白紙から考えていった。それなのに結社運営とこれだけ対立する状態になっている。歴史があるかないかでここまで違ってくるものなんですね。こうした比較が出せたことも、ラエティティアの一つの成果なのかも知れません。

■加藤 インターネットの廃墟もあちこちにあるわけだから、運営する者の意志が重要ですね。

■荻原 結社にとって電腦化はたしかに困難だし、急務なのかどうか

かはわかりません。ただ、たとえば「塔」が、結社としてはじめにホームページをたちあげた。それから小林信也さんたちを中心にe歌会(電子メール歌会)をやっています。永田和宏さんたちの大がかりな改革の他に、その電脳化の部分が入口や接点になって、結社での活動に大きな楽しみを見出ししている人たちもいるようです。あるいは「短歌21世紀」「短歌人」も、インターネットでの交流で、誌面的な制約をかなり補完しているように見えます。最近スタートした「心の花」のホームページの電子掲示板には、佐佐木幸綱さんや俵万智さんがコメントをいろいろ書きこんでいて、印刷メディアだけだとすべからぬ冷たい感じになる交流を、あたかも補う効果で出ているように感じました。そして、大切なのは、そうした各結社の動きが、部外者であるところのところにまで伝わって来ていることではないでしょうか。一部分とは言っても、ひらかれているわけです。印刷メディアだけでは、不特定多数に向かって数居の高さを解消できませんから。

■加藤 地下茎で繋がっている。

■荻原 ラエティティアの「結社化」については、グループ運営にかかわることなので、すこし言いにくいところもありますが、加藤さんの言う「メンバーシップの強化」「教育機能」のレベルならば、実際、ゆるやかに進行しつつあるのではないのでしょうか。加藤さんとぼくの間でも感覚はまちまちなのかな。ぼくは、ラエティティアのように、強制をほとんどしないグループが、遊び心と向上心をあわせもったままで、文芸のグループとして完成するのには、五年から十年はかかるのではないかと見込んでいます。今年はまだ四年目ですから、道のりは約半分というところでしょうか。これからの数

年が正念場ですね。強引に何かを導入するか、粘り強く成長を見守るか、判断に苦しむ数年になるでしょう。

■加藤 インターネットで伝統継承が難しいとか、教育、研究といったものが困難だというのは、先入観に過ぎないかもしれない。ネット、テーマ選定、方法・文献の議論を進めて、最終的にスクーリングといったことも、やれないことはないですね。

■荻原 それから、さきほど書きましたが、グループの外部に向けて「@ラエティティア」という機関誌を発行しています。メールマガジンです。現在の発行部数が七百。これはまだ大した数字ではありませんが、これまでの配信希望者の増加から判断して、数年後には二、三千部になると予測しています。むしろ数がすべてではありませんが、そのあたりも一つのターニングポイントになるでしょうか。大型結社誌クラスの発行部数になりますし、メディアとしても、ある力というものを、否定なく備えることになるでしょうか。

■加藤 将来、ラエティティアのメンバーが千人を超えるあたりで、地滑り的な変化が起きるはずですよ。怖いですね。

さて、最後に、近刊の荻原さんの全歌集『デジタル・ビスケット』に触れながら今後の展望をお伺いしたいと思います。『新星十人』(一九九八年)の「ぼくであることの奪還」というエッセイで「自分の等身大の日常の中に感じているあのかけがえのなさ」と書かれています。それを奪還するんだと。これは、塚本や寺山の〈私〉の拡大、仮構とは反対のポジションにあると思われまふ。じゃあ、荻原の〈私〉が近代短歌の私性、リアリズムから解けるのか。第四歌集までは、わりと普遍的な青年像として読めた。第五歌集にあたる『永遠青天症』では、詞書が多用されるなどして、普遍的という

ころを壊していますね。社員旅行の歌とかあって、ここまで歌うのかと驚くんですが。近代以降の〈私〉と違うのかどうか。ぼくの眼には、液化した〈私〉が修辭という容器の中で〈私〉の形をしている、そんな印象なんです。『永遠青天症』から引いておきます。

ききとめる「いま・ここ」を強く肯へば二人を包む鰻のけむり
三十代のからだをつひに逃げ出した苺のけむりのやうな日となる
日常があるから夢があるのかな逆かな、櫻のあをにまみれて

『デジタル・ビスケット』について、あるいは今後の展望についていろいろお聞かせください。

■荻原 はい。まず「全歌集」というスタイルですが、いわゆる家集としての全歌集という場の変革を強く意識しました。以前、加藤さんに「一冊の歌集が一つの修辭／方法論で成り立っている」「NHK歌壇」一九九九・一」と言われたように、ぼくはたぶん、成長するタイプではなく、変容するタイプなので、それらを一冊にまとめてやっと「第一歌集」なのかも知れないと思っただけです。企画自体は、沖積舎の沖山隆久さんからいただいたのですが、砂子屋書房の田村雅之さんも相談のつてくれて、歌集が本質的にどうあるべきか、たくさん考えさせてもらいました。「自己プロデュース」などと大口を叩いてしまうときもありますが、編集者の存在というのはほんとに大きいですね。

■加藤 大きいです。

■荻原 未刊歌集として収録した『永遠青天症』もやはり場のことを意識した編集です。詞書もその一つで、事実べったりの退屈な世界かも知れませんが、作家以前の一人の人間として、この世界のどのあたりに立っているのかを見てもらうため、自身でも考えるため

の補助線のつもりでした。この世界は「神」とか「死」とか、人間には絶対に侵犯できない領域を含んでいると思うのです。そこに踏みこめっていると錯覚しない、自戒の意味もあります。場の分裂・細分化の時代に、とりわけ危険なのは、作家がその場の「神」になろうとすることですから。場がどれだけ細分化されようと、どこにでも「信仰のない」他者はいらる。他者がいるからこそ〈私〉もある。そんなことを考えながらの編集でした。伝統的な文体に親和したところもあるし、あるいは脱塚本とか脱寺山と見えるかも知れませんが、彼等は以前とかわらず、ぼくの「指導者」です。

今後も、デジタルメディアの活用の他に、場の問題から入るというスタイルがしばらく続きそうで、たとえば、短歌と「異物」との接点に生まれる場をいろいろ模索してみたいと考えています。「異物」というのは、一つには散文です。江田浩司『アンゲルス・ノーヴス』、藤原龍一郎『東京式』、水原紫苑『うたものがたり』とか、あのあたりに良質な大鉱脈がありそうな気がして、これまでの歌集では実現できなかった空間のひろがり、小説等とは違ったひろがりを生み出す大きな動きにできないものかと頭をひねっています。加藤さんもぜひ力をかけて下さいね。

■加藤 あなたと活動していると、短歌は未知の領域に充ちていると実感します。お忙しいなか、どうもありがとうございます。